

## 関根俊一先生のご退職にあたって

奈良大学文化財学科の美術史学の分野で2014年より教鞭をとられた関根俊一教授が定年退職されることになった。日々の御指導に篤く御礼を申し上げたい。

関根先生の研究分野は、仏像研究、工芸研究多岐にわたり、それぞれの分野で顕著な業績をあげられている。作品を見る力のすごさは調査に同道するとわかる。長身瘦躯の先生が須弥壇にひらりと登られ、壊れやすい木彫仏を抱き下ろされては、次々後補の部分指摘され、的確に時代判定される。工芸品などは同じ形に作る人が多いのに、形状や質感のごく微細な違いを見抜いて判断を下される。あとで史料が出てきて答え合わせをすることになってもはずれることがない。判断に慎重になれる時は何度も足を運んで御覧になる。見ることが好き、考えることが好き。美術史家の理想である。

関根先生の予定は常にびっしりつまっている。「スケジュール照会があつて空いてる時間があると正直に言っちゃうんだなあ」と事もなげに言われるが、いったいどうやって、あれほどの超人的な御活躍をなされるのか。

関根先生の詳細なご経歴・業績は別頁をご参照いただきたいが、対外的には文化庁、国立博物館をはじめとする博物館美術館、自治体文化財審議会の委員長、委員、学内では副学長、図書館長、総合研究所長、博物館長の要職をつとめられている。

要職を務めていても学内業務を厭われないし、学生指導には決して手を抜かない。関根先生には熱狂的なファンがいて、ゼミは常に大所帯だが、それぞれの学生に懇切な指導をされる。また、関根先生は、全国各地で学芸員や文化財専門職をつとめる教え子が担当する展覧会にフットワーク軽く足を運ばれる。「心配していたけれど、楽しそうにやってて本当によかった」と卒業生や修了生が担当した図録を嬉しそうに配られることも多々ある。

新型感染症対策のためにオンライン授業が主になった2020年〜2021年度には、正倉院宝物に関するリアルタイムオンライン自主ゼミをされていたし、博物館実習では密を避けるために実習回数を増やして受講人数を分散された。学生が学芸員の資格をとれるようにしたいという一心での手弁当である。しかも、それを自己犠牲の美談として、他の教員がただ働きをさせられる実績に使われないように、法人に苦情を言われることもあった。コロナ禍における学生への支援を打ち出すように先頭にたたれるのも関根先生だった。

関根先生が退職されるのは本当に寂しい。でも、だいじょうぶ。私たちは、秘仏の御開扉に行けば関根先生に会えることも、文化財に関わっていれば先生にお会いする機会があることも知っているから。

関根先生、本当にお疲れ様でした。

原 口 志津子

(奈良大学文化財学科教授)